

景観要素としての地域を象徴する色に関する 文化地理学的考察

中 村 周 作

I. はじめに

宮崎県のホームページによると、県のシンボリックな事物として県の木がフェニックス、ヤマザクラ、オビスギ、県の花がハマユウ、県の鳥がコシジロヤマドリとなっている¹⁾。お隣の鹿児島県では、同様に県の木がカイコウズ、クスノキ、県の花がミヤマキリシマ、県の鳥がルリカケスとされている²⁾し、熊本県では、県の木がクスノキ、県の花がリンドウ、県の鳥がヒバリ、県の魚がクルマエビとなっている³⁾。このように各都道府県で木や花、鳥、魚、獣などがシンボルとして採用されている。この他、地域のシンボルとして、いわゆる‘ゆるキャラ’が各地で定着し、様々な活動を介して地域おこしに活躍している。しかし、地域を象徴するものは、そういった人々がイメージしやすい事物だけではない。地理学でいう景観の様々な構成要素を分解して抽出した地域の色や音⁴⁾、臭い(香り)などといったような五感で感じる要素もまた、重要なシンボルたりえる。例えば事例は少ないが、神奈川県相模原市が、市の色を緑と定めている。また、さいたま市では、小中学生の投票によって決定された10区のシンボル色を公表している⁵⁾。地域の色について、建築学などでも都市景観構成要素としての構造物の配色に関する研究は多いが、文化地理学では、地域のイメージそのものとしての色も重要となってくる⁶⁾。

本稿では、地域景観の構成要素の一つである色(シンボルカラー)を取り上げる。具体的には、各都道府県を特徴付ける様々な事物、例えば風景、建築物、農畜水産物、工芸品などの特産品⁷⁾などをピックアップし、それらの色をもとに、都道府県それぞれを象徴する色の抽出、選定を試みる。

こうした試論について、筆者は、先に九州各県の色に関する考察を行い、公にした⁸⁾。本稿は、その続編として、日本の47都道府県それぞれの象徴的地域色について、以下、考察を進めていく。地域の色を選定するに当たって、先述のように各都道府県を特徴付ける様々な事物の色を比較、類型化することで、当該地域を特徴付ける色の選定を試みる。しかし、実際に作業を行うと、地域を特徴付けるものが多様多彩で、絞り込むことに困難を覚えるところも多かった。そういったところでも、地域の特徴がぼけてしまわないよう最大でも4色までに限定することを目指した。

II. 各都道府県を特徴付ける景観要素としての色に関する考察

(1) **北海道の色：赤、黄、白** 北海道は、自然や農畜水産物が多彩な地域である。北海道の特産品として、毛ガニや花咲ガニ、秋鮭の肉色、いくらなど赤色のものが多い。北海道の花に指定されているハマナスの花も赤、大産地十勝の小豆も赤系(小豆色)である。黄色い産物として、ジャガイ

モ、大豆、ビール、チーズ、バター、トウモロコシ、札幌ラーメン、夕張メロンも食味部分は黄色である。北海道の3色目としては、長い冬の期間に大地を埋め尽くす雪の白を選択したい。白い特産として、生産日本一の牛乳、同有数の米、タマネギ、甜菜糖、ホタテ貝、銘菓白い恋人などがあげられよう。道の鳥に指定されているタンチョウヅルも大部分が白、羽先の黒と頭頂の赤が際立つ美しい鳥である。牛乳を生産するホルスタイン種は、白と黒の牛である。この他、紫のブドウとワイン、茶色のエゾシカ、道産子、キタキツネなどがあげられるが、ここでは、赤、黄、白の3色を北海道の色として選定しよう。

(2) **青森県の色：赤、白** 青森県は、生産日本一を誇るリンゴの産地である。有名な大間のマグロも赤身の魚、ホヤ、スジコも赤い。また、奥入瀬溪谷や八甲田山など秋の紅葉の名所も多い。津軽国一の宮である岩木山神社も赤い外観の神社である。一方、冬の雪に代表される白も重要な景観色である。青森県の鳥に指定され、冬にシベリアから渡ってくるハクチョウ、生産の多いニンニクや長イモ、ゴボウも白、ないし薄黄色であろうか。ホタテも白、スルメイカも新鮮なうちは茶系、時間がたつと白く色が変わる。なお、県の花に指定されているリンゴの花は薄紅色、赤と白の融合色といえよう。ということで、青森県の色は、赤と白である。

(3) **岩手県の色：黒、茶、金** 岩手県のイメージとして、質実剛健な色として黒があげられる。岩手県の代表的産物として南部鉄器の黒、日本一の生産量を誇る木炭、生産が北海道に次ぐコンブ、一関の亀の子せんべいなど黒ごまを使った菓子類、黒平豆、黒小豆など黒の他、県の鳥に指定されているキジも黒、および茶系である。また、漆の生産も多く、伝統の秀衡塗は、黒、赤地に金の蒔絵が見事である。黒以外の産物としては、生産が全国一のワカメがある。なお、ワカメは海中では茶、煮ると緑、煮込んでいくとまた茶色に変わる海藻である。同じく生産の多いアワビも茶系、わんこそば、南部せんべいなども薄茶、郷土料理であるひつつみ（小麦粉を練ったものをちぎり入れ、野菜などを使う鍋）も総じて茶系、先述のキジ、それから県の木である南部アカマツを含め、茶系も多く出てくる。また、世界文化遺産である中尊寺金色堂（日本三大金色堂の一つ）、岩手県の推奨米として2017年に栽培が始まった「金色の風」、先述の秀衡塗など金もインパクトが強い。この他県の花に指定されているキリの花や、生産日本一のリンドウの紫もある。こうしてみると、岩手県の色は、紫も捨てがたいが、量・質ともに豊かな黒と茶にインパクトの強い金の3色としておこう。

(4) **宮城県の色：赤、白、茶、緑** 仙台のような大都市を有する宮城県は、人も色も多彩である。仙台の七夕では、赤、黄、緑、青、紫など実に多彩な飾りがたなびき、宮城県の多彩さを象徴するようである。宮城県の名所、名物、特産などを色別にあげる。まず、赤いものとして、全国鹽竈神社の総本山であり陸奥国一の宮でもある鹽竈神社の社殿や、鳴子峡などの秋の紅葉がある。また、有名な牛タンやホヤ、捕鯨基地である石巻市鮎川で水揚げされるクジラ赤身肉、鳴子のこけしは、木地にいろんな色を使うが、基本色は赤である。仙台味噌も赤味噌に入るし、くるみゆべしも赤系の菓子である。銀鮭の切り身も白身魚ではあるが、実際には赤い。宮城県の花に指定されているミヤギノハギは、赤紫や白の花をつける。次に白いものをあげると、名物笹カマボコ、有数の生産を誇るヒラメは、外見が茶色の白身魚である。宮城県は、ササニシキやひとめぼれなどのブランド米が生まれた地であり、松島湾のカキも著名である。これに、温麺、和紙、葛、総称して‘白石三白’も加わる。この他、茶色のものをあげると、先述のヒラメ、宮城県の鳥に指定されているガンや、県の獣のシカも茶系の動物である。岩手県に次ぐ生産をあげているワカメも、茶色い海藻である。先述のくるみゆべしや仙台味噌も茶系の赤い名物でもある。緑色の名物にずんだ餅、茹でワカメ、‘杜

の都’のシンボリックな仙台定禅寺通のケヤキ並木、城のあった青葉山も緑に因む地名であろう。山形県との県境にある蔵王のお釜も、見事なエメラルドグリーン火口湖である。他に気仙沼の黄色いフカヒレや雄勝町の黒い硯などもよく知られるところである。こうしてみると、宮城県の色は、赤と白、これに数的には減るが、印象度の強い色として茶と緑を加えた4色としよう。

(5) 秋田県の色：白、茶 秋田県には、白い名物が多い。日本有数の豪雪地帯であり、冬になると県全域が雪に覆われるし、横手のかまくらも冬の風物詩である。日照時間が短いこともあって色白の秋田美人も有名である。食べ物として、あきたこまちに代表される米が都道府県別第3位の大産地であるし、米を使うきりたんぼ、日本三大うどんに数えられる稲庭うどん、生産の多い八郎潟などのシラウオ、八幡平（松館）の絞りダイコン、にかほ市象潟町の岩ガキ、なれずしであるハタハタずしは、米の白、ニンジンの赤、ハタハタの茶が混ざる伝統食である。秋田県は、米、水、冬の寒気が揃う一大酒造処でもある。清酒は、透明ないし薄黄であるが、醪の状態ではもちろん白い。この他では、県の木に指定されている秋田スギ、同じく県の鳥であるヤマドリ、干しダイコンのいぶりがっこ、比内地鶏、大館を中心に生産される‘畑のキャビア’と称されるとんぶり、同じく大館の伝統工芸品である曲げわっぱ、能代春景塗など茶系の特産品も多い。また、緑系のものとして、世界自然遺産である白神山地のブナ林、伝統野菜の高さ2mにもなる秋田フキ、ぬなわ（ジュンサイ）など、赤系として白神山地他多くの紅葉の名所があるし、男鹿半島のなまはげにも顔が赤（爺さん）、青（婆さん）がある。青で言うと、田沢湖の青い湖面も美しい。その他、県の花に指定されているフキノトウが黄、秋田市の夏祭りとしてたくさんの提灯が橙色に輝く竿燈祭りも著名である。秋田県は、鉱業が盛んであったこともあり、銀線細工など銀色の工芸品もある。以上、秋田県の色も多様であるが、地域の特徴を示す色として、白と茶をあげたい。

(6) 山形県の色：白、赤、茶 山形県も深い雪の白のイメージ、他に庄内米、生産日本一のラフランス（西洋梨）、上山市に多い干し柿は、茶色地に白い粉をふいた名産である。山形県は、文字通り山の国であり、深い山々と豊かにたたえる水が溪谷を刻んでできた230もある滝も、水しぶきが白い。赤い特産としては、佐藤錦や紅秀峰などのブランドがあるサクランボ（山形県の木に指定）の印象が強いが、黄色い花を赤い染料として使う山形県の花に指定されている紅花も名高い。東北地方の山々は、落葉広葉樹に覆われ、秋の紅葉が美しい。特に山形の宝珠山立石寺は、紅葉の名所として著名である。最後のもう1色であるが、山形県の名物と言えば、天童の将棋の駒、これは木地から茶系の産物であろうか。芋煮会も有名であるが、芋煮は、初期にはサトイモと棒ダラを使っていた。現在は、地域によって食材が違うが、肉、ジャガイモ、ニンジン、ダイコン、ネギ、コンニャクなどを味噌や醤油仕立てで作る鍋であり、全体としての色味は、やはり茶系であろう。銘菓くぢら餅や玉コンニャクも茶系、先述の干し柿も茶色い産物でもある。この他、緑で山を覆うブナ林、緑のただち豆（枝豆）もあるが、山形県の色は、白、赤、茶の3色としよう。

(7) 福島県の色：赤、白、黄 まず、福島県印刷工業組合が選定した「ふくしまのいろ」14色とその根拠をあげてみる。すなわち、1. 鶴ヶ城の白壁と赤瓦（会津若松市）イメージ色は赤、2. 滝桜（三春町）薄紅、3. モモ（福島市）桃色、4. 白河ダルマ（白河市）赤、5. あんぽ柿（伊達市）橙、6. 大内宿（下郷町）黄土色、7. 新宮熊野神社長床（喜多方市）イチヨウ葉の黄、8. 凍み豆腐（福島市）白ないし薄黄、9. モリアオガエル（川内村）緑、10. 岩瀬キュウリ（須賀川市）緑、11. 大堀相馬焼青磁（浪江町）青緑、12. 猪苗代湖（猪苗代町・郡山市・会津若松市）青、13. 塩屋埼灯台（いわき市）白、14. 石炭（いわき市、常磐炭鉱）黒である⁹⁾。色分けすると、赤系が1～5、白系が8、13、黄系

6～8、緑系9、10、青系11、12、黒14となっている。これ以外の特産物等をあげると、紅（赤）系として主要作物であるトマト、日本固有のベリーで、夏に紅葉するナツハゼ（ただし、食用となる実は熟すと黒くなる）、モモやネクタリン、リンゴなどの果実の生産も多い。会津の代表的な民芸品である赤べこも赤、福島県の花に指定されているネモトシャクナゲが白、もしくは薄紅色である。東北地方でも、福島県沿海部（浜通り）では、冬でも雪が少ないが、西の山間部である会津地方は豪雪地ということで、雪の白もある。この他、幕末会津藩の白虎隊や白河の関、白河のうどん、そばなども白いものであろう。県の鳥キビタキが黄系、伝統の会津漆器の基本色が赤と黒であろうか。こうしてみると、福島県の色は、赤、白、黄の3色が際立っている。

(8) 茨城県の色：赤、白、黄、緑 常陸国風土記より、この地の土豪を大和朝廷が攻めた際に、いばらの城を築いて退治した等の由来から地名がきているとのこと、この時代のノイバラの花は白であろう。ただ、茨城県の花に指定されているバラのイメージカラーは赤であり、神話とは違っている。ウメで有名な偕楽園には六名木として、紅の江南所無、柳川枝垂、烈公梅、白の白難波、月影、虎の尾の紅白3種ずつが指定されている。こうしてみると、茨城県の名物には、白と赤双方が揃っている。この他の赤いものとして、赤ネギ‘ひたち紅っこ’や、国営ひたち海浜公園に多く植えられている秋の紅葉が美しいコキア、大子町の永源寺も、もみじ寺と称される紅葉の名所である。また、サッカーJリーグ鹿島アントラーズのチームカラーも赤である。生産・消費が多い蒸しダコは、表面が赤、身が白色をしている。これに絡めて白い名物として、県の魚に指定されている白身魚のヒラメや霞ヶ浦の伝統漁船である帆引き船、生産日本一の淡水真珠などがある。なお、黄色いものとしては、生産日本一を誇る一連のもの、すなわち、干しイモ、ビール、ちょっと茶色がかかった黄土色ではあるが納豆、鶏卵も黄身が該当する。さらに言えば、極めつけは歴史上の人物である水戸光圀も、官位中納言の唐名からくる黄門様と呼ばれていたことはよく知られるところである。また、茨城県には常陸台地に広大な畑地が展開すること、東京市場に近いことから近郊農業が盛んであり、日本一の生産をあげている野菜類が多い。その中でもハクサイ、レンコン、カリフラワーは白い野菜と言えるであろうか。緑の野菜で生産日本一をあげると、レタス、夏ネギ（白と緑）、ミズナ、チンゲンサイ、コマツナ、ピーマン、メロン（中が黄、外が緑）などがある。先述のコキアも、夏には緑色が美しい。こうしてみると、茨城県の色は、赤と白が際立ち、黄と緑が続く。そこで、茨城県の色は、赤、白、黄、緑の4色としよう。

(9) 栃木県の色：赤、金、茶 栃木県は、イチゴの生産量が1968年より全国1位であり、とちおとめ、スカイベリー、とちひめという全国的にも有名なブランドがある。県でも「いちご王国とちぎ」を名乗っている。「栃木県いちご研究所」では、品種開発、収穫量や品質の向上に向けた研究が行われている。他の赤いものとしては、日光などの秋の紅葉、中禅寺や鷲子山上神社など赤い寺社があげられる。次に金色のものとして、観光スポットとして有名で世界文化遺産にも登録されている日光東照宮がある。なお、ここは、金閣、中尊寺金色堂と並ぶ日本三大金色堂と言われる。数的には少ないが、金も、栃木の色として強烈なインパクトがある。この他の特産物をあげるならば、宇都宮ギョウザやカンピョウが著名であろうか。ギョウザはきつね色（茶系）、カンピョウは白いが、戻して使うとやはり茶系になる。郷土料理で新巻鮭の残りを使う‘しもつかれ’も赤茶系の料理である。益子焼の基本色は、黒、茶とされる。また、那須街道では、景観形成・維持のために条例によって屋外看板は茶地に白文字という規制がある¹⁰⁾。ということで、栃木県の色は、赤、金、茶の3色としておこう。

(10) **群馬県の色：緑、茶、赤、白** 群馬県の特徴的なものとして、内陸で緑の木々で覆われた山々の広がり、高原野菜の産地で全国一の生産を誇るキャベツの他、キュウリ、枝豆、フキ、ハクサイ、ハウレンソウ、レタスなど緑の野菜生産が多いこと、下仁田ネギなどの伝統野菜がある（ただし、おもに食用にされるのは緑の部分ではなく、白い茎の部分）。次いで茶色いものとして、世界遺産の富岡製糸場も茶色いレンガ造りの建物、名物焼きまんじゅうや特産のコンニャクも茶系である。また、郷土料理の鍋であるおつきりこみ、温泉水を使う磯部せんべい、温泉饅頭発祥の地とされる伊香保温泉の饅頭も茶色、味噌パンやら日本一高層県庁舎の壁面も薄茶色である。群馬県は、平野・水田が少なく、もともと小麦食の盛んな土地柄である。先述の饅頭系やおつきりこみもそうであるが、水沢うどんや桐生のひもかわうどんなど白い粉食物も多い。白と言えば、現在でも繭の生産日本一であるし、秋間・榛名・箕郷の三大梅林の白梅、紅梅も見事である。ちなみに、群馬県は、梅実の産地でもあり、梅酒や赤い梅干しの生産も多い。この他、赤いものとして、先述の紅梅の他、有名な高崎ダルマ、同じ高崎の少林山達磨寺の紅葉も美しい。上野国一の宮貫前神社も赤い神社である。その他、青緑色の美しい湖である白根山の火口湖湯釜なども個性的な色である。こうしてみると、群馬県の色は、緑、茶、赤、白の4色としたい。

(11) **埼玉県の色：緑、白** 埼玉県の特徴的なものとしては、秩父山地など豊かな緑の山々、特産品である深谷ネギや狭山茶、東京市場への近郊農業の産物として日本有数の生産量を誇るコマツナ、ブロッコリー、ハウレンソウ、キュウリなどがある。また、県の蝶に指定されているミドリシジミもある。農産物としては、白系のカブ、切り花として出荷されるユリの生産も多い。県の鳥に指定されているシラコバト、生産日本一の行田の足袋も、最近は多彩な色物が出てきているが、基本色は白であろう。秩父でセメント原料として採掘される石灰岩も白系の鉱物である。岩槻、鴻巣で生産が多いひな人形は、お内裏様とお雛様で白、赤のイメージ色であろうか。当県から隣の群馬県にかけては、小麦粉食が盛んで、埼玉県は、うどんの生産量が香川県に次ぐ2位となっているというように白系の産物も多い。赤としては、浦和レッズ、先述のひな人形の他、長瀬に代表される紅葉の名所がある。2016年にユネスコ無形文化遺産に選定された橙色に提灯が輝く秩父夜祭、Jリーグ大宮アルディージャのチームカラーも橙である。茶系の食べ物として、鍋物である煮ほうとう、草加せんべい、全国有数の生産を誇るサトイモがある。また、晴天日数が日本一を数えるということで空の青、深谷市に本社のある赤城乳業のガリガリ君も多彩であるが、基本色は、ソーダ味の青であろうか。伝統工業としての川口の鋳物産業も名高い。鋳物は黒い名産品であろう。こうしてみると、埼玉県の色は実に多彩であるが、その中でも特徴的な色として、緑と白の2色をあげたい。

(12) **千葉県の色：緑、黄、白、赤** 千葉県も、東京市場を目指す近郊農業の大産地である。常総台地（洪積台地）が広がる地形条件も、畑地農業の展開に有利に働いている。日本有数の生産を誇る緑系の野菜として、ハウレンソウ、ネギ（おもに食するのは白い部分）、サヤインゲン、枝豆、キャベツ、シュンギク、ソラマメ、ナバナ（菜の花）、シロウリなどがあげられる。また、黄系の産物として、ラッカセイ、サツマイモ、トウモロコシ、ヒマワリなどの生産も多い。千葉県の花とされる菜の花、スイセンも日本三大水仙群生地（他に兵庫県淡路島、福井県越前海岸）に数えられる白と黄の花である。九十九里浜の砂も黄色である。白系の産物としては、ダイコン、先述のネギ、カブ、ナシ、マッシュルームなどがある。この他の白いものとして、千葉ロッテマリーンズのキャラクターにもなっているカモメや船橋、市川沖で獲れる大型のホンビノス貝もある。赤系のもので、スイカ、ニンジン、キンメダイといった産物の他、千葉県のマスコットキャラクターであるチーバ君も赤い。

銚子や野田で多く生産される醤油もできあがり時には赤、酸素に触れると黒に変わる。鴨川市付近の海岸で採れるヒジキも黒い。その他、プロ野球球団である千葉ロッテマリーンズのチームカラーも赤、Jリーグ、ジェフユナイテッド千葉が、黄、緑、赤、柏レイソルが黄となっている。ということで、千葉県の色は、緑、黄、白、赤の4色としよう。

(13) **東京都の色：灰、赤、茶** 東京都を象徴する色として、ビルが林立し、排気ガスなどで遠方が霞むモノトーンの灰色が浮かぶ。また、赤いものとして、東京タワーや赤レンガ造りの東京駅がある。浅草寺や増上寺、寛永寺といった著名な寺も赤系の本堂を持つ。また、江戸切子の基本色は、赤（銅赤色）と青（瑠璃色）、江戸川特産の金魚も基本色は、赤と白であろう。東京都の花に指定されているソメイヨシノは、薄紅色である。この他の名物として佃島の佃煮、伊豆諸島のくさやの干物、人形焼き、もんじゃ焼きなどは、茶系であろうか。明治神宮も茶系の建造物である。薄茶（黄）として、雷おこしや伊豆大島の椿油もある。スカイツリーは、スカイツリーホワイト、つまり白い塔である。伝統野菜として知られる長大な練馬ダイコンも白い。この他、生産はなくなったが、大田区大森に問屋が集中するノリ（浅草ノリ）が黒の産物であろう。東京都は、農業は盛んとは言えないが、ブルーベリー（青紫色）の生産が日本一である。この他、読売ジャイアンツのチームカラーであるオレンジと黒などいろいろあるが、東京都の色は、灰、赤、茶の3色としておこう。

(14) **神奈川県の色：赤、白、青** 神奈川県を象徴する色として、まず、赤いものをあげると、横浜中華街、横浜港の観光スポットになっている赤レンガ倉庫、鎌倉鶴岡八幡宮の社殿、伝統の鎌倉彫、秋の箱根の紅葉も見事である。秦野で栽培が盛んなカーネーションや、三崎漁港のマグロ赤身料理もある。一方、白いものをあげると、横浜のシュウマイや肉まん、小田原カマボコ、湘南シラス、三浦ダイコンなど美味しいものが並ぶ。この他、神奈川県の花に指定されているヤマユリ、県の鳥カモメも白系、再建された小田原城も白い城である。神奈川県には海、港のイメージからくる青も多い。プロ野球横浜ベイスターズのチームカラーが青であるし、Jリーグの横浜Fマリノスが青、白、赤、川崎フロンターレが水色、黒、白、横浜FCが白、水色、青、湘南ベルマーレが緑、青、白ということで、全てに青系が入っている。海水浴やサーフィンでも名高い湘南海岸や、箱根芦ノ湖の湖面も青い。ということで、神奈川県の色は、赤、白、青の3色としよう。

(15) **新潟県の色：白、赤** 新潟県は、山間部を中心に世界最大級の豪雪地帯であり、4mを超える積雪量の記録がある。ウィンタースポーツも盛んな地域なので、白がまず浮かぶ。ブランド米コシヒカリに代表される生産日本一の米も白である。当県は、主原料である水よし米よしで、有名な‘淡麗辛口’の清酒処でもあり、県酒造組合傘下の酒蔵が89もある¹¹⁾。清酒は、透明ないし、薄黄色であるが、醪の段階ではもちろん白い。県の草花に指定されている雪割草も白、県の観賞魚、日本一の生産をあげる錦鯉は、小千谷市山古志が中心的生産地であり、基本色が赤、白、黒である。次に、錦鯉繫がりや赤いものをあげていくと、特産のズワイガニ、ベニズワイガニ、県の木に指定されている雪椿や南蛮エビ、サケの身、村上のはらこ、県の鳥に指定されている朱鷺も薄紅色である。なお、県の花に指定されている新潟市、五泉市などで生産日本一を誇るチューリップは花色多彩であり、おもには白、赤、桃、黄、橙、紫、緑、茶、黒の9色あるという。以上いろいろあるが、新潟県の色としては、白と赤を選出しよう。

(16) **富山県の色：白、桃、茶** 富山県の色としても、まず浮かぶのは白であろう。立山連峰の雪景色がきわめて象徴的であるし、県の魚にも指定されている特産の白エビ、氷見うどんも白、水田単作地帯である富山平野で作られる米（おもにコシヒカリ）も白、県の鳥である雷鳥も冬は白い。な

お、新潟県のところでもあげたが、当県の花に指定されているチューリップの花色は、白、赤、桃、黄、橙、紫、緑、茶、黒の9色あるという。なお、白エビは、透き通った白地に薄紅の斑点を持ち「富山湾の宝石」と称されている。著名なマス寿司も、寿司飯を覆うマスの身は薄紅（桃）色である。もう一つの県の魚、寒ブリも著名であるが、ブリ刺しも薄紅（桃）色であろうか。この他、薬売りで有名な越中富山の反魂丹は茶色の丸薬である。これも県の魚に指定されているホタルイカの塩辛も茶色である。富山で昔から蝦夷地から北前船で持ち込まれる身欠きニシンの昆布巻き、ブリの昆布締めなどコンブが郷土料理としてよく使われる。コンブは、深緑がかかった茶色の海藻である。伝統工芸として有名な南砺市井波の彫刻も、木肌色（薄茶色）が基本色であろう。以上、取りまとめると、富山県の色は、白、桃、茶の3色となる。

(17) 石川県の色：赤、黒、白 石川県の赤いものとしてイメージされるのは、冬のズワイガニ、甘エビ、兼六園の紅葉、当県特産のブドウ品種である‘ルビーロマン’、伝統の輪島塗の赤と黒（漆黒）といったところであろうか。次に黒繫がりで見ると、石川県の花に指定されているクロユリ、県の鳥であるイヌワシも黒褐色の鳥である。他に、北陸のイメージで言うと、やはり冬の雪に象徴される白がピックアップされるであろう。県のシンボル、かつ信仰の山でもある白山、兼六園の冬の雪吊りの景観、金沢城も白い城である。また、伝統のかぶら寿司は、かぶらにブリの身を挟んで発酵させた白系のなれずしである。金沢の伝統工芸品として金箔は有名であるが、金色が1品だけというのは少し弱いか。なお、これも500年の伝統を持つとされる加賀友禅で使われる基本色は、‘加賀五彩’と称される大きな枠組みで言うと、青、赤、黄、緑、紫の5色である。同5色は、また、九谷焼の彩色においても基本色となっている。こうしてみると、様々な特徴的な色が展開する本県であるが、五彩のうちの赤に加えて黒と白の3色を県の色としよう。

(18) 福井県の色：白、赤、茶 福井県も、やはり冬の雪景色のイメージが強い。県の花に指定されているスイセンに関して、越前海岸は日本三大水仙群生地（他に淡路島、南房総）の一つに数えられ、冬に白と黄の花が咲き誇る。他に、現在日本で最も生産の多い米の品種であるコシヒカリの発祥地であること、生産日本一の手漉き和紙、北前船で運ばれてきた敦賀名産のおぼろコンブに、色の上で白と黒が存在すること、伝統の絹織物羽二重と、関連する銘菓羽二重餅も基本色は白であろうか。赤い名産として、冬の名産である県の魚でもある越前ガニ、赤カブ、‘越のルビー’のブランド名がついたトマトなどの他、敦賀の氣比神宮も赤い建造物、同じく敦賀には国の有形文化財に指定された赤レンガ館もある。若狭の名産、ぐじ（アマダイ）は、薄紅色の高級魚である。渋い茶系の名物、名産も多い。もともと仏教に関わる精進料理の食材として使われ、現在でも日本一の消費を誇る油揚げは薄茶、県の鳥に指定されているツグミも茶系の鳥、名物越前ソバも薄茶系か。これも若狭が有名なサバなどの糠漬であるへしこ、敦賀の銘菓求肥昆布、おおい町他のとち餅、自然釉の越前焼も基本色は茶であろう。永平寺や丸岡城も茶系の建造物といえる。この他、越前市旧武生の打刃物は鋼色（銀）、東尋坊の見事な安山岩柱状節理は灰色系、冬食の銘菓として知られる水羊羹は薄紫（小豆色）など色々あるが、福井県の色としては、白、赤、茶の3色を採用しよう。

(19) 山梨県の色：紫、赤 山梨県は、比較的乾燥した内陸盆地の気候と水がはけやすい扇状地形を活かした果樹栽培が盛んで、特に紫のブドウの印象が強い。この他、当県は、古くからの水晶の産地で紫水晶もある。伝統の革製品である甲州印伝は、赤、黒、紺、紫、茶などシックな色合いが特徴である。河口湖畔大石公園の夏のラベンダーもある。山梨県といえば、ブドウを原料とするワインの大産地でもあり、赤と白（透明）双方が揃う。果樹栽培の盛んな当県では、赤いサクランボ

の生産も多い。また、山梨県の木に指定されているカエデも赤い。歴史的に戦国最強と称賛された武田軍団は、元祖赤備え（赤い甲冑）として敵から恐れられた。日蓮宗の総本山である身延山久遠寺も本堂や五重塔が赤い。この他、名物のほうとうは、太い麺や具を味噌仕立てで作る茶色い名物である。また、内陸ではあるが、アワビの煮貝も茶色い当地名産となっている。桃色も、モモや県の花に指定されているフジサクラがあるが、数的にやや少ないか。シンボルである富士山冠雪の白、青木ヶ原の樹海の緑などもあるが、やはり、山梨県の色としては、紫と赤をあげたい。

(20) 長野県の色：緑、白、赤、茶 長野県でまず、あげられるイメージ色は緑である。山々に囲まれた森の緑はもちろん、漬け菜の大分を占め、生産日本一の野沢菜や、これも生産日本一のワサビ、Jリーグ松本山雅のチームカラーも緑である。当県は、高原野菜の大産地であり、緑系の野菜類、例えばレタス、セロリ、ズッキーニ、ハクサイ、アスパラガスなど日本有数の生産を誇っている。次にスキー場が多い当県は、やはり冬、雪の白が出てくる。白い名物として、厳冬期諏訪湖に表れる御神渡り、もともと米の代用食として小麦粉やそば粉で作った皮で具を包んで焼いたおやき（具は多彩だが、外見は白い）、ソバの白い花、県の鳥に指定されているライチョウ、県の木に指定されているシラカバ、また、キノコ類の生産も多く、エノキダケやエリンギも白系の産物と言えるであろう。赤いものとしては、日本有数の生産を誇るリンゴ、花卉類のカーネーションやアルストロメリアも多彩ではあるが、メインカラーは赤であろう。ワイン生産では、1位が山梨県で長野県は2位となっているが、こと赤ワインに限ると、長野県が日本一である¹²⁾。桜肉とも称される馬肉の生産・消費も多い。伊那高原の名物に成長しつつある赤ソバ（高峯ルビー種、もともとヒマラヤから種が持ち込まれた）、そして、歴史上名高い大坂の陣で活躍した真田信繁配下の赤備えもある。この3色以外で、多く出てくる色が茶色である。名物の五平餅や佐久鯉のうま煮、ザザムシの佃煮、信州味噌、ソバも打った麺は薄茶色、ブナシメジもある。名所として著名な善光寺、諏訪大社なども茶系の建造物である。以上のことから、長野県の色は、緑、白、赤、茶の4色としておこう。

(21) 岐阜県の色：赤、白、茶 岐阜県の色として、まず赤いものをあげてみよう。岐阜県の花に指定されているレンゲソウが薄紅、飛騨の赤カブ、赤カブ漬、伝統玩具であるざるぼぼ、日本三大美祭に一つに数えられる高山祭（他に京都祇園祭、秩父夜祭り）の屋台も、赤い幕などで飾られて街を曳き回される。岐阜県で生産の多い花類であるシクラメンやバラ、ベゴニア、セントポーリアなども赤系の花々である。次いで白い名産、名物などをあげると、合掌造りの里白川郷は、やはり冬の雪景色が似合う。県の鳥に指定されているライチョウも冬は白い。恵那市山岡町は、日本一の白い細寒天の産地として知られる。岐阜城や郡上八幡城も、白壁が際立つ白い建造物である。この他茶系のものをあげると、白川郷の合掌造り民家の他、中山道の馬込宿の街並み、木質を活かした漆器である飛騨春慶塗、茶色いたれのかかった五平餅などがある。この他、名物の焼き物として、美濃焼の基本色は、淡黄、黒、白、緑であり、多治見のカラータイルは、まさに多彩、長良川鵜飼の黒い鵜（海鵜）、鋼色の関の刃物類、Jの下部リーグに所属するFC岐阜のチームカラーである緑など色々あげることができるが、やはり、岐阜県の色としては、赤、白、茶の3色をあげておこう。

(22) 静岡県の色：茶、赤、蒼（青緑） 静岡県のシンボルは、富士山であろうが、これの色は山体の青と冬季冠雪の白であろうか。富士の麓には白糸の滝もある。当県の特産、名物をあげていくと、まず、生産日本一のお茶があげられる。お茶が茶色なのか緑色なのか微妙ではあるが、ここでは茶としておこう。浜名湖のウナギの蒲焼きも茶色、浜松ギョウザ、静岡おでん、富士宮焼きそばも茶色であろうか。焼津のカツオブシも、削ると茶色の薄片（節）になる。静岡県の花に指定されている

ツツジの代表色は赤であろうか。久能山の有名な石垣イチゴも赤、生産日本一の花弁ガーベラも赤系の花、焼津や清水で水揚げされるマグロ、カツオ類は、いわゆる赤身の魚である。駿河湾特産のサクラエビも薄紅（赤系）、伊豆下田で近年水揚げが多いキンメダイも赤い水産物である。この他、静岡と言え、何と言ってもミカンの橙がある。Jリーグサッカーチーム清水エスパルスのチームカラーも橙である。一方、ジュビロ磐田は青系がチームカラーである。生産の多い緑のワサビや、特徴的な黒はんぺんもある。こうしてみると、静岡県の色は、茶、赤と、富士の山体、樹海、洪積台地に広がる茶畑を合わせた深い青緑として蒼の色を採用しよう。

(23) 愛知県の色：茶、赤 愛知県の色として、まずあげられるのは茶色である。愛知県は、八丁味噌が有名で、味噌カツや味噌煮込みうどん、味噌おでん、土手焼きなど味噌を使った料理が多い。その他の名物である名古屋コーチンやいろいろ、手羽先なども茶系と言える。その他、熱田神宮の茶色い本殿、きしめんにも茶色のたまり出汁を使うし、ひつまぶしも茶色いタレをまぶす。奥三河の郷土料理でもある五平餅もタレが茶色い。弥富の名産金魚にも茶系のものがある。瀬戸焼、常滑焼も釉薬を使うことで茶を始めとする多彩な色を使う（茶、黄、赤、緑、青）。県の鳥に指定されているコノハズクも茶色い羽を持つ。県の魚、クルマエビも、濃淡交互に並ぶ茶系のエビである。この他、色で赤いものとして、大須観音や先述した弥富の金魚、瀬戸焼、常滑焼、伊勢湾や三河湾で獲れるガザミ（ワタリガニ）も茹でると赤くなる。愛知県の木に指定されているハナノキも春に真っ赤な花を咲かせる。また、白いものとして、名古屋城や犬山城は、ともに白い城である。黄色いものとして、三河湾のアサリ（むき身は黄色がかった白）や日本一の生産を誇る食用菊などがある。この他、三河湾のノリ（黒）や名古屋城天守の金の鯨も著名である。こうしてみると、愛知県の名産も多彩であるが、中心は茶、赤であろう。

(24) 三重県の色：赤、白、茶 三重県の色として、赤いものは、三重県の魚にも指定されている生産日本一のイセエビや、日本三大和牛の一つに数えられる松阪牛、志摩地方の郷土料理で、カツオやマグロなど赤身の魚身を醤油ダレに漬けて込んで、寿司飯と合わせる手こね寿司などがある。この他には松阪の伝統野菜である赤菜（ダイコンのような形の赤カブ）、伊勢の名物赤福は、赤心慶福（赤子のような気持ちで人の幸せを喜ぶ）からきているとされる。白色に関しては、志摩地方の真珠や冬の味覚であるありのりふぐ、鳥羽のカキ、桑名のハマグリ、築城の名手藤堂高虎の手になる伊賀上野城も白い城である。また、全国からやってくる伊勢神宮の参拝客に供される名物伊勢うどんは、白い太麺に黒い出汁を絡めて食べる。次に当地最大の象徴的建造物として、伊勢神宮があげられる。神宮の建築物は総じてシックな茶系、鎮守の森を形成する神宮スギ（三重県の木に指定）、鳥居前町であるおはらい町も茶系の落ち着いた街並みである。志摩特産のアワビ、四日市の土鍋や急須が著名な萬古焼も、基本色は紫泥（褐色）ということで茶系と言える。県の鳥に指定されているシロチドリは、頭や羽が茶、腹が白い。ということで、三重県の色は、赤、白、茶の3色としよう。

(25) 滋賀県の色：赤 滋賀県の色は、赤である。たとえば、日本三大和牛の一つに数えられる近江牛の肉色であったり、秋の琵琶湖周辺や東近江市永源寺の美しい紅葉の景色が代表的なものである（ちなみに、滋賀県の木はモミジである）。また、毎年1月に守山市の勝部神社と住吉神社で行われる火祭りも、赤白ふんどし一つの若衆が真っ赤に燃える大松明の回りを乱舞し、無病息災を祈るといふ祭りである。近江八幡の郷土食である赤コンニャクも地元でよく知られるが、その由来に派手好み、赤好みの織田信長の影響があるとか。今は失われた安土城も天守が赤かった。江戸時代彦根を治めた井伊家の初代直正は、その強さから赤鬼と称されて畏れられた。井伊の赤備え、赤い軍団も

著名である。神社としては、近江神宮の赤門も見事である。また、江戸時代、近江は、富山や大和などと並ぶ製薬業地であり、健胃薬である赤玉神教丸で知られる。赤カブ（万木カブ）の糠漬けも、当地の名物である。赤以外の名産としては、フナズシが橙と米の白、ビワマスの身がサーモンピンク、信楽焼の著名なタヌキは、茶と白であろうか。日本一の大湖琵琶湖が水色、琵琶湖の淡水真珠も白く輝く貴重な名産である。しかし、こうしてみても、やはり滋賀県を代表する色は赤であろう。

(26) 京都府の色：茶、白、金、紫 京都府の色として、まずあげられるのは茶である。京都市では、条例によって景観を形成する人工物（街並みや自動販売機、電柱など）の色彩について厳しい制限がある¹³⁾。場所によって違いがあるが、例えば歴史的な街並みに関しては、黄赤、黄、無彩色で低彩度、中明度の色を使う。市街地に関しては、黄赤、黄、紫、紫青、無彩色で低彩度の色を使うなどということ、街並みに関しては、茶ないし薄黄系の色が多くなっている。この他、京都府の茶色いものとしては、慈照寺銀閣や南禅寺、清水寺、三十三間堂、平等院鳳凰堂など数多ある古刹が茶系の濃い建造物である。また、特産品である丹波栗も茶色の産物である。一方、白いものとして、舞妓さんの白塗り、京都土産の定番である生八つ橋にも白系がある。京野菜の聖護院ダイコン、聖護院かぶ、京こかぶも白い産物である。京都府指定無形文化財である綾部の黒谷和紙も白である。この他龍安寺に代表される石庭も花崗岩を崩した白砂（小礫）で、川などを表す紋様が描かれる。なお、京都府の草花に指定されている嵯峨ギクは、白、黄、赤、ピンクなどの繊細優美な花を咲かせる。府の鳥に指定されているオオミズナギドリは、背が灰、腹が白い鳥である。3つめの金は、鹿苑寺金閣や、金糸を使う絢爛豪華な西陣織、金粉を使って蒔絵を描く京漆器などがあげられる。近年話題の金運スポット御金神社もある。最後の紫は、いかにも雅な京都らしいエリアカラーである。京都府旗や同志社大学旗の生地、プロサッカーチーム京都サンガのチームカラーの他、伝統京野菜の賀茂ナスや京山科ナスなどもある。この他、赤いものとして、伏見稲荷、八坂神社、平安神宮、下鴨神社などの神社、金時ニンジンなどがあるが、数的には少し足りないか。とすることで、京都府の色としては、茶、白、金、紫の4色を採用しよう。

(27) 大阪府の色：黄、白、黒 大阪のような都会は、人も色も多様、かつ個性的であり、色の特定が難しい。阪神タイガースは、現在兵庫県西宮市を本拠とするプロ野球球団であるが、もともとは大阪に本社があったチーム名‘大阪タイガース’であり、大阪のチームと言っても問題はなからう。球団のイメージカラーは、黄、ないし白と黒である。大阪府の木に指定されている街路樹のイチョウも秋の黄葉が美しい。また、大阪名物であるお好み焼きやたこ焼きに使われる小麦粉や卵の色でもある。黄以外の大阪らしいものをあげると、白の豚まん、てっちり、てっさ（フグ）、白味噌の雑煮などがある。また、かつて河内や和泉は、白い綿花栽培の中心地であった。豊臣秀吉の時代、大坂城は黒系の城であったが、現在の城は白系に変わっている。大阪府の花は、ウメとサクラソウで、いずれも色としては白、ないしピンク系である。有名なけんか祭りである岸和田だんじりでは、黒法被を着た男たちが、だんじりを曳いて街を駆け巡る。大阪の街を闊歩する黄と黒のヒョウ柄を着たおばちゃんの姿もあまりにも有名であろうか。この他の色として、あべのハルカスが水色、通天閣は銀色系の建造物である。こうしてみると、大阪らしい色としては、メリハリの効いた黄、白、黒のタイガースカラー、これらが明るくパワフルな大阪府の住民性にも適った色々である。

(28) 兵庫県の色：白、赤、黄 兵庫県の色も多様である。まず、あげられる白色のものとして、国宝、世界文化遺産にも指定され、白鷺城と称される姫路城、県の花に指定されているノジギクの花びら（舌状花）がある。日本三大水仙群生地に数えられる淡路島の水仙も、白と黄の花である。ま

た、灘地方には多くの清酒メーカーが立地する。清酒は、透明ないし薄黄色であるが、醪は白い。酒米として有名な山田錦の生産も、兵庫県が日本一である。竜野のそうめん、神戸ワインの白、淡路島のタマネギ、かつて生産が盛んであった赤穂の塩、県の鳥に指定されているコウノトリなどがあげられよう。次いで、赤色のものとして、神戸の北野町異人館のシンボリック建築物である風見鶏の館が赤レンガ造りである。中華街や神戸ポートタワー、神戸牛や神戸ワインの赤、全国生産1位を誇る松葉ガニ、明石のタイやタコ、淡路島のカーネーションも著名であろうか。商売の神様蛭子系えびす3.5千社の総本山である西宮神社の本殿も赤い。黄色は、ノジギクの花の芯の部分（筒状花）の色であったり、明石焼きや阪神タイガースのチームカラーなどがイメージされる。この他、宝塚歌劇団5組のイメージカラーが「花組」の赤、「月組」の黄、「雪組」の緑、「星組」の青、「宙組」の紫となっている。甲子園の芝や復活が待たれるツタの緑、丹波栗やイカナゴのくぎ煮、日本一の生産を誇る小野のそろばんの茶色、丹波の黒豆、明石のノリ、先述のコウノトリの風切羽の黒、三木の刃物（鋼色）などもあるが、数的・量的に豊かな白、赤、黄の3色を兵庫県の色としよう。

(29) 奈良県の色：白、赤、茶 歴史のある奈良県の色として、まず白があげられる。現在、奈良盆地で広く栽培されている米は、九州由来のヒノヒカリである。古い歴史を持つ奈良酒も、醪は白い。桜井の三輪そうめんも著名である。‘パールホワイト’という白イチゴも売り出しである。茶色としては、奈良公園の鹿、現存する世界最古の木造建築群と言われる法隆寺も、外観は茶系である。東大寺や唐招提寺なども、外観は茶系の寺院である。東大寺と言えば大仏も建立当初は金色であったが、今はそれがはげて銅地金の深い茶色である。奈良の街並みも木造の茶色が目立つ。また、奈良漬けや、県の木に指定されている吉野スギの木肌も茶系である。一方で、当県に多い寺社の中には、赤い社殿を持つもの、例えば春日大社や興福寺も目立つ。赤と言うと、この他に大和牛の肉は、赤もしくはピンク系であろうか。大和郡山市特産の金魚も、赤い観賞魚である。ピンクと言うと、県の花に指定されている奈良八重桜も美しい。正岡子規も俳句に詠んだ橙色の柿は、生産が日本有数である。ということで色々あげたが、結論として奈良県の色は、白、茶、赤の3色としよう。

(30) 和歌山県の色：白、橙、赤 和歌山県の色として、まずあげられる白いものとして、白浜町にある石英砂の白い白良浜海岸と、同町にあるアドベンチャーワールドに6頭ものパンダがいて、これは、言わずと知れた白と黒の珍獣である。県の花に指定されているウメの花も白い。紀州徳川家の和歌山城も、白い城である。また、由良町の白崎海洋公園も、白い石灰岩の並ぶ海岸に特徴がある。橙として、生産日本一を誇るミカン是有田地方、柿は紀ノ川流域が生産の中心となっている。赤いものとしては、南高梅として有名な南部の梅干し、生産の多いイセエビや紀三井寺の楼門がある。また、県の魚に指定されているマグロも赤身魚である。歴史的に真田父子幽閉の地である九度山町は、彼ら赤備えに因む赤色で、現在町おこしを図っている。また、イルカなど海獣の灰色もある。江戸時代から捕鯨の盛んな太地町を中心に、クジラ（こちらは、背が黒、腹が白）やイルカの捕獲、伝統料理食材としての消費が多い。また、当県には由緒ある寺社が多い。高野山金剛峯寺や熊野大社の建物は、渋い茶色であろう。農産物としては、緑系の山椒やグリーンピースの生産が多い。県の鳥に指定されているメジロも黄緑色であろうか。こうしてみると、和歌山県の色は多様であるが、数的に見てあえて絞ると、白、橙、赤となる。

(31) 鳥取県の色：白 鳥取県の観光地として有名な鳥取砂丘の砂は、内陸側は黄、沿岸が灰白色である。また、2005年にラムサール条約の湿地に登録された米子水鳥公園では、コハクチョウの越冬風景がみられる。そして、名産である二十世紀梨、砂丘ラッキョウも生産日本一、白イカ、白ネ

ぎ、冬に雪を被った鳥取砂丘の冬景色など白い名物や特産が多い。二十世紀梨の白い花が、県の花に指定されているし、伯耆富士と称される大山の雪景色も美しい。神話「因幡の白ウサギ」もよく知られるところである。この他に、松葉ガニの赤、県の鳥に指定されているオシドリは茶系、県の魚であるヒラメも外観が茶系の白身魚である。ということで、鳥取県の色は、他を圧倒する質・量を誇る白としよう。

(32) 島根県の色：茶、白、桃 島根県には、古く格式の高い神社、縁結びの神としてよく知られる出雲大社や西宮とは別系統の事代主系えびす3千社の総本山として知られる美保神社があり、これらの建物は総じて茶系である。名物の出雲ソバやアゴ野焼き（トビウオの焼きかまぼこ）も茶色であろう。一方、宍道湖が日本一の生産を誇るヤマトシジミは、殻が黒く、身は白い。県の鳥に指定されているのは、宍道湖や中海で越冬する白鳥である。浜田の名物塩干しカレイも白い。石見銀山でかつて生産された銀は、白銀とも言うなど、白系のものも多い。また、島根県の花は、これも生産日本一、大根島が主産地のボタンで、これは桃色の美しい花である。中国地方では、山間地を中心に昔からワニ（サメ）の刺身が好まれてきた。ワニは、死ぬと身にアンモニアが回り、保存が利く。これを水でよくさらして桃色の刺身として食した。桃色でもう一つ、益田の老舗酒蔵で造る「桃色しづく」という銘柄の酒もある。ということで、島根県の色は、茶、白、桃の3色としたい。

(33) 岡山県の色：桃、茶、青 岡山県は、その特産などを考えていくと、色を絞るのが難しい県である。まず、桃色系ものもとして、当県には、桃太郎伝説がある。モモが特産で、‘清水白桃’や‘おかやま夢白桃’などのブランドがある。県の花も、モモの花が採用されている。この他、茶系の産物としては、伝統の備前焼、きびだんごなどがある。黄緑系としては、特産のマスカット、青系として、瀬戸内式気候で「晴れの国おかやま」を標榜する晴天、青物の魚としてサワラやママカリも有名である。また、児島は、日本のジーンズ発祥地とされる青い生地の町である。伝統のばら寿司は、多様な彩りと豊かな味を誇る郷土料理である。こうしてみると、桃色に加えて伝統の茶、バラエティに富んだ青の3色を岡山県の色としよう。

(34) 広島県の色：赤、茶、白 広島県には、宮島の海上に浮かぶ赤色の大鳥居と社殿で有名な厳島神社がある。当神社は、世界遺産にも登録され、松島や天橋立と並ぶ「日本三景」の一つに数えられる。また、プロ野球球団広島カープもチームカラーが赤である。この他、県の木に指定されている帝釈峡の紅葉がある。当県には、戦争の負の遺産とも言える原爆ドームがある。世界平和を訴え、1996年に世界遺産に登録された。この原爆ドームの外観は茶系であろう。有名な広島風お好み焼きや銘菓もみじ饅頭も、茶色の名物と言えよう。宮島のしゃもじも、茶系の名物であろうか。白い産物としては、日本一の生産（2018年度、全国生産の58.9%）を誇るカキがある。尾道の耕三寺は、白い大理石を使った造形物、また、清酒処東広島市西条の酒醪も白い。廿日市の中国醸造では、生乳を使った白いお酒のシリーズを出している。ということで、広島県の色は、赤、茶、白の3色としよう。

(35) 山口県の色：赤、茶、白 山口県の色として赤は、海外観光客から脚光を浴びている長門市の元乃隅稻成神社123基の赤い鳥居、防府天満宮の社殿、宇部の月待ちガニ（ワタリガニ）、柳井の金魚ちょうちん、伝統の大内塗は、赤の生地に黄緑や金箔で彩色を施す漆器である。また、押し寿司の一つである伝統の岩国寿司は、錦糸卵の黄、エビの赤、レンコンや酢飯の白、シイタケの茶など色とりどりのごちそうである。茶色の名物・特産として、岩国の錦帯橋やライトアップされた秋芳洞内も茶系の色合いであろうか。豊浦の瓦そば、小野田アサリ、周防大島の茶がゆ、下松の笠戸

ヒラメ、山口市のワラビ粉を使うういろいろには、黒、白、抹茶の3色があるが、代表色は茶であろう。最後の白い名物・特産としては、県の花に指定されている城下町萩を彩る夏ミカンの白い花、白い城である岩国城、県の魚に指定されている下関のふく（トラフグは、背が黒、腹が白い）、ふく提灯も腹が白、背が濃茶であろうか。先述の岩国寿司も基本色は酢飯の白、岩国レンコン、笠戸ヒラメも刺身にすれば白身が美しい。以上のことから、山口県の色は、赤、茶、白ということで、奇しくも隣県広島県と同じ色になった。

(36) 徳島県の色：桃、白、茶 徳島県の色として、まずあげられるのは桃色である。名物の阿波踊りの装束は、カラフルであるが、女性の着物が総じて桃色系である。切り花生産日本一の洋ランもある。鳴門の蓮の花は、夏に桃色の見事な花を咲かせ、収穫された白いレンコンは日本有数の生産を誇る特産物である。阿南市の明谷梅林の紅白ウメ、佐那河内村徳円寺のシャクナゲも美しい桃色の花をつける。白から連想されるものに、県の花に指定されているスダチの白い花、県の鳥シラサギ、四国八十八箇所遍路旅の白装束、鳴門の白い渦潮も有名である。また、茶系の産物として、生ワカメ、金長まんじゅう、小松島の竹ちくわ、徳島ラーメンなどがある。阿波国と言われていた江戸時代、当地の特産が藍染め（藍・青系）であった。緑の産物として、スダチや鳴門の茹でワカメも有名である。J2 徳島ヴォルティスのチームカラーは、藍と自然を表す緑、情熱の赤の3色となっている。なると金時（サツマイモ）は黄色、阿波ういろは、小豆色（紫系）の産物、県の木ヤマモモの実も赤い。ということで、徳島県も色々あるが、県の色として、数の多さと印象度から桃、白、茶の3色をあげたい。

(37) 香川県の色：白、黄 香川県は、‘うどん県’と称される。したがって、まず取り上げられるべき色は白であろう。江戸時代当地の名産として、‘讃岐三白’、すなわち、塩、砂糖、綿花があった。かつて盛んであった沿岸での製塩業は、昭和46（1971）年に塩田全廃ということで姿を消した。伝統の砂糖である和三盆は、現在でも東かがわ市で造られている。綿花も昭和37（1962）年まで栽培が行われていた¹⁴⁾。この他、香川県の正月雑煮は、あんこ餅が入った白味噌仕立ての独特なものである。小豆島のそうめんもある。県の花に指定されているオリーブも、白い可憐な花を咲かせる。徳島でもあげたが、四国八十八箇所遍路旅の白装束も印象が強い。次いで金比羅さんのイメージカラーは黄ないし金、伝統の高級砂糖和三盆も、基本色は白ないし淡い黄色、小豆島特産のオリーブオイルも黄色系、高松琴平電気鉄道琴平線のイメージカラーも黄色である。この他、当県で最初に養殖技術が開発されたハマチ（県の魚に指定）は赤身魚である。花卉として生産の多いラナンキュラスは、県のオリジナルブランド手まりシリーズとして、白、赤、藤、桃、黄など多彩である。ということで色々あるが、香川県の色としては、白と黄を採用したい。

(38) 愛媛県の色：橙、茶 愛媛県の色として、まずあげられるのは橙である。当県は、日本有数の柑橘類産地であり、ミカン色の県である。松山市内と周辺地域との交通を担う伊予鉄道車両のイメージカラーも橙色である。県の鳥コマドリも頭が橙色である。次いで茶系のものをあげる。大洲の銘菓志ぐれ、ひざりやき（松山の今川焼き）、じゃこ天、じゃこカツ、三津浜焼き（松山のお好み焼き）、今治焼き鳥、せんざんぎ（東予地方の鶏のから揚げ）など多くの郷土食がある。また、道後温泉本館、板壁で覆われた松山城、四国八十八箇所のうち愛媛県にある26の寺も茶系の建造物である。この他、坊ちゃん団子は、茶、黄、緑、タルトは、黄と黒の銘菓、生産日本一を誇る宇和島の養殖真珠は白系、砥部町の砥部焼は、白と藍の焼き物、黒系の薄墨羊羹、有名な宇和島の闘牛も黒牛といたように色々なものがあるが、愛媛県の色は、印象度からも橙と茶の2色としよう。

(39) **高知県の色：赤、緑** 高知県の魚に指定されているのが赤身のカツオ、その代表的な料理がカツオのたたきであり、当県はその消費量日本一である。また、当県の代表的なお祭りであるよさこい祭りは、鳴子を持った踊り子たちがよさこい節に合わせて市内を踊り歩く。その参加者は、全国から200チーム、約2万人にも上る。この踊り子たちの着物も多彩であるが、基本色が赤である。宿毛の特産であるサンゴも赤、有名な観光スポットであるはりまや橋も赤である。県の花に指定されているヤマモモの雌花や実も赤い。この他の特徴的なものをあげていくと、海、黒潮の青と黒、スギを中心とする山林の緑、農産物としては日本有数の生産をあげているものだけでも、ユズの黄、盛んな施設園芸作物として、ニラ、ピーマン、シシトウ、キュウリなどの緑、ナスの紫、ショウガの薄黄土色など多様である。したがって、高知県の色として、赤にあえて加えるならば、これらの特徴的な事物の中でも多く出てくる緑であろう。

(40) **福岡県の色：赤、白、黒** 福岡県の地理的特徴を並べてみると、実に多彩であり、特定の色を選定することが難しい。いろんな場所からいろんな人々や文化が集まる大都市を含む当県は、それゆえ人も色も多彩である。主要な特産品の色をあげると、赤が明太子、イチゴ（‘あまおう’や‘とよのか’）、博多ラーメンの上に乗る紅ショウガ、太宰府天満宮の社殿および紅梅をあげることができよう。なお、ウメは紅白合わせて福岡県の花に指定されている。県の木であるツツジも花が赤い。秋、英彦山参道や吞山観音寺の紅葉も美しい。一方、北九州・筑豊とくれば、伝統的に黒の石炭、鉄鋼、有明海産のノリも黒である。また、白系では博多うどん、太宰府天満宮の白梅、梅ヶ枝餅（外が白、中の餡が黒系）、博多祇園山笠の白装束、筑後平野の米などがある。この他、当県のシンボリックなスポーツチームに成長したソフトバンクホークスのチームカラーが黄と黒、伝統の久留米餅の基本色が藍と白などがあるが、ここでは、めでたい赤と白、それに黒の3色を県の色としよう。

(41) **佐賀県の色：白、黒** 佐賀県の特産品は、伝統的に白と黒と言われてきた。それは、かつて佐賀段階、新佐賀段階¹⁵⁾と2度にわたって単位面積当たり収量日本一を記録した米であり、1960（昭和35）年頃まで、当地の基幹産業であった炭鉱から産出する‘黒いダイヤ’と称された石炭であった。この他、長崎から長崎街道（俗称シュガーロード）を通ってくる白砂糖、石炭産業が終焉を迎えた直後からは、現在まで日本一の生産を誇る有明海の養殖ノリも代表的な白と黒の産物である。県の鳥に指定されているカチガラス（カササギ）は、胸と腹が白く周りが黒い。また、小城市物の羊羹は、白系のザラメ、砂糖と黒系の小豆を使った菓子である。肥前田代で作られてきた貼膏薬は、今でこそ目立たない肌色であるが、初期のものは黒く、痕が残らないように白い膏薬が後に開発された。佐賀平野特産のレンコンも、黒い泥田で作られる白い産物である。かつて、その漁獲で大いに栄えた呼子のクジラも背が黒、腹が白の海獣である。この他、黒系と言えば、有明干潟の阿蘇火山灰性の潟泥、上場台地から東松浦半島に至る地域の基盤岩である玄武岩、有明海の珍魚ムツゴロウも青白い斑点を散りばめた黒系の魚体であろうか。黒毛和牛の佐賀牛も著名である。一方、白系と言えば、佐賀県の花に指定されているクスノキの花、もともと佐賀平野裏作の小麦で作られてきた神埼そうめん、佐賀県を代表する産業の一つである有田焼などの白磁、かつて有明海の主要産物であったカキも殻は黒、身は白系である。大和川上峡の白玉饅頭、呼子のイカ、白石平野の裏作で作られるタマネギも白系であろう。佐賀県の特産物としては、この他にミカン、嬉野茶、イチゴ‘さがほのか’、金糸などを使う佐賀錦、唐津くんちの代表的な曳山である鯛のような派手な赤もあるが、やはり地道、堅実な県民性を反映した白と黒でまとめるのが、佐賀県らしいといえよう。

(42) **長崎県の色：黄、白、赤** 長崎県にもたくさんの名物がある。有名な長崎の銘菓カステラ、

平戸のカスドース、壱岐のカスマキがあり、これらは卵と白砂糖を効かせた黄色い菓子である。茂木ビワ、壱岐のウニ、ザボン、北海道に次ぐ生産を誇るジャガイモも黄色であろう。長崎、小浜などのチャンポンには多彩な具が入るが、麺やスープの基本色は黄色であろう。また、歴史的には江戸時代ヨーロッパから唯一物資が入ってきた長崎には、いろいろな舶来品が入ってきたが、その中でも白砂糖は、菓子や料理に広く使われてきた。長崎料理の食味が、一般にかなり甘いと言われる理由である。ちなみに、当時貴重な白砂糖は、長崎街道を東進して佐賀、福岡にももたらされ、これらの地域でも各地で独特な菓子類が発達したことで、長崎街道が俗に‘シュガーロード’と称されることもある。日本で最も早く中国から製法が伝えられたと言われる五島うどんや、島原そうめん、島原のスイーツであるかんざらしに入る白玉団子、壱岐の白麴ムギ焼酎は、白色系の名産品である。また、昔から捕鯨の拠点であったことからクジラの赤身、県の花に指定されている雲仙ツツジ、県の花木の五島のツバキも赤である。長崎中華街、ランタンフェスティバルの赤提灯など赤も重要な県の色であろう。これら以外にも、有明海のノリの黒などがあるが、総じて言うと、豊かさ・めでたさを表す黄、白、赤の3色が際立っている。

(43) 熊本県の色：赤、黄 熊本県の風土、特産品としては、火の国阿蘇山の噴火色、ブランド牛である肥後の赤牛、伝統の地酒である赤酒、馬刺し(桜肉)、植木のスイカ、八代の塩トマト、天草のマダイやイセエビ、熊本市には赤味噌もある。J傘下のサッカーチームロアッソ熊本のチームカラーも赤である。それ以外の名物として、熊本ラーメンや辛子レンコン、県南で産する世界最大の柑橘類である晩白柚、有明海や八代海で採れるアサリ身の黄色があげられる。また、熊本県は橙色のミカンの大産地でもある。天草の真珠やいきなり団子の外見、米焼酎である球磨焼酎の醪などは白である。県の花に指定されている阿蘇のリンドウが青紫、県の魚に指定されている天草のクルマエビが濃茶と薄茶といった茶系の縞模様、肥後国一の宮である阿蘇神社や人吉の青井阿蘇神社も社殿が茶系、有明海のノリが黒、加藤清正の築城になる熊本城も黒い城である。といったように、熊本県も色々あるが、県の色としては、情熱の赤と比較的多く産物などが出てきた黄をあげよう。

(44) 大分県の色：赤、白、茶 九州・瀬戸内文化の結節点である大分県も、色合い的には多彩である。まず、赤いものをあげると、全国の八幡様の総本山である宇佐神宮の社殿、紅葉で有名な耶馬溪、生産の多いホオズキ、保戸島のマグロも赤身魚、完熟の赤採りトマトも売り出しである。大分県の花・木に指定されている豊後梅は薄紅色であるし、白杵福良天満宮の招福赤猫もある。次いで白いものをあげると、大分は、‘おんせん県’と称され、源泉数、湧出量ともに日本一、各地で温泉の白い湯煙が上がる。津久見で盛んなセメント製造業の原料となる白い石灰の生産量も日本有数、九重宝八幡の白猪も招福で知られる。茶色いものとしては、生産日本一の乾しシイタケ、別府市の茶系の籠などマダケを使った竹細工も知られる。中津・宇佐名物の鶏のからあげ、佐伯市の郷土料理でうどんなどのダシに使われるごまだしも薄茶色、伝統の小鹿田焼の基本色は白と茶であろう。名物だご汁(やせうま)も麺は白、汁は薄茶系である。この他、著名な関サバ、関アジは青魚(青)、耶馬溪の青の洞門、カボスは緑、豊後の黒牛の黒、別府温泉の多彩さで知られる地獄には、海地獄(青)、血の池地獄(赤)、白池地獄(白)、鬼石坊主地獄(灰)などの色がある。大分県も実に多彩であるが、赤、白、茶の3色を県の色として採用したい。

(45) 宮崎県の色：黒、白、緑、赤 宮崎県の風土、産物などの色として、まず、黒牛、霧島黒豚、冬の‘サトネリ’で知られる日南の黒砂糖、黒麴焼酎、黒皮カボチャ、噴火を繰り返す新燃岳の火山灰、県南部に広がる火山灰(黒ボク土)などの黒があげられよう。養殖が盛んになりつつある

チョウザメの卵（キャビア）も黒い。次いで白の産物として、宮崎市田野町を中心に日本一の生産を誇るタクアン原料のダイコン（タクアン自体は黄色）、白麴焼酎、県の花に指定されているハマユウの白い花、白い鶏ブロイラー（鶏肉）生産も日本一である。緑のものも多い。例えば綾の照葉樹林、造林された豊かなスギ林、施設園芸農業が盛んで緑のキュウリ、ピーマン、ゴーヤ、ズッキーニなども日本有数の生産を誇る。赤いものとしては、縁結びの神様で知られる青島神社や鶴戸神宮の社殿、赤身魚であるカツオ、マグロ、これも日本有数の生産と品質を誇る完熟マンゴー‘太陽の卵’は外見が赤、果肉が橙の産物である。橙とえば、‘たまたま’のブランド名を持つキンカンも生産日本一を誇る。その他、茶系として、宮崎神宮や天岩戸神社、高千穂神社などの社殿、生産日本一のスギ丸太も茶系であろう。こうしてみると、宮崎県も実に多彩であるが、黒、白、緑、赤の4色を県の色として採用したい。

(46) 鹿児島県の色：白、黒、赤 鹿児島県の特産品や名物を色で見ると、黒牛、黒豚、薩南諸島の黒砂糖、黒麴焼酎、霧島市福山の黒酢、始良市竜門司や鹿児島市谷山、日置市美山などの黒薩摩焼、いちき串木野のマグロ（マグロの語源は、切り身が赤黒い‘真っ黒’からきてるとされる）、大島紬も基本色は黒であろう。さつま地鶏も黒い。桜島が吹き上げる火山灰、大隅半島に広がる火山灰土壌（黒ボク土）など黒が際立っている。それ以外では、桜島大根や火山灰（シラス）、日置市美山などの白薩摩焼、銘水菓子白熊、伝統の白麴焼酎といった白が目立つ。代表銘菓‘かるかん’も外が白、中の餡が黒系である。この他、赤いものとして、霧島神宮の社殿、夜輝く桜島の噴火色、県の花ミヤマキリシマ、県の木カイコウズも赤い花をつける。日本一の生産を誇るサツマイモの黄や紫、知覧茶、屋久杉も茶系であろう。奄美に生息する県の鳥ルリカケスは頭部が濃青色、飛来数日本一の出水のナベヅルは灰色、現在営業が日本唯一となった菱刈鉱山の金、再興された薩摩切子は、紅、藍、紫、緑、金赤、黄の6色を基本色にカットガラスの美しさをみせる。などなど色々なものがあるが、黒、白、赤の3色が、熱い情熱を持ち、白黒つけたがる県民性にもマッチしている。

(47) 沖縄県の色：赤、緑、黒、茶 沖縄県の色として、まず赤とえば、琉球のシンボルである首里城がある。首里城は、かつての王宮として、壁も瓦も赤い中国風の建築物である。残念ながら2019年10月31日に焼け落ちたものの再建が期待されている。沖縄県の花に指定されているデイゴ、ハワイなどから移植されたとされるハイビスカスも黄、白、ピンクなどの花色もあるが、やはり最も目を引くのは赤であろう。紅芋（サツマイモ）もある。また、県の魚に指定されているグルクンは、海中では鮮やかな青であるが、死ぬと体色が赤に変化する。したがって、市場や店で見かける時は、鮮やかな赤い魚である。伝統の沖縄赤瓦も、もちろん赤い。次いで緑のものと言えば、やんばるの森がある。この森は、ヤンバルクイナに代表されるような珍しい動植物の宝庫で、2016年に国立公園、さらにユネスコの世界自然遺産登録を目指している。沿岸の汽水域に展開する亜熱帯植物に特有のマングローブ林、海ぶどうやゴーヤ、シークワサーも緑色の産物である。最後に、黒と言えば、特産の黒糖、黒毛和牛の石垣牛などがある。泡盛は、伝統的に黒麴を使って原料の碎米を糖化する。生産量が宮崎県を上回るマンゴーは外見が赤、中身は黄色である。壺屋焼の基本色は、青、緑、茶となっている。琉球ガラスも多彩であるが、橙、茶、緑、水色、青、紫の6つが基本色とされる。生産日本一のモズクは、茶系であろうか。当県で生産されないが、歴史的な経緯で消費の多いコンブ料理は、深緑であろうか。こうしてみると、沖縄県の色として、赤、緑は納得。これらに加え、黒と茶色の4色としよう。

Ⅲ. 終わりに

以上、各地の特徴的事物の色を取り上げることで、地域の地理的特徴をエリアカラーで表現するという試論を進めてきた。その結果、47の各都道府県において採用された色(事物)は、のべ133を数えた。それらの色の内訳をみると、日本を象徴する色は、白(計35、採用色全体の26.3%)、次いで赤(計33、同24.8%)となり、まさに日本の国旗である日の丸の白と赤が、日本の地理的環境を象徴する色であることがわかる。この場合の白は、北国の雪や全国に展開する白系野菜、九州の白砂糖や火山灰のシラスなどであった。また、赤は、各地の神社などの神聖な建物であったり、情熱や強さを表す旗印であったりした。これらに次ぐのが茶色(計24、同18.1%)であり、各地木造の古い建造物やおいしさを誘う郷土料理に多い色であった。さらに、緑(蒼を含む。計10、7.5%)は、降水が豊かで、かつ山の多い日本の自然を表す色、また、都市近郊農業で生産が盛んな緑色野菜の色であった。黄(計9、6.8%)も、各地の産物の色であった。黒(計8、6.0%)は、九州に卓越する事物、質実剛健の地域住民性を象徴する色でもあった。この他、桃(計4)、金(計3)、紫、橙、青(各2)、灰(1)という内訳となった。

なお、地域の色を選定するに当たっては、一般に客観的にみて評価が高いと思われる地域の特徴的事物を取り上げて、それらの色を比較していく中で、地域そのものを特徴付ける色の抽出に努めた。しかし、取り上げた事物の選定に、多少なりとも筆者の関心に基づく恣意性がなかったかどうか、いささか心許ないところはある。その意味でも本稿はあくまで試論であり、各界の批判をいただきながら、より内容的な精度を高めていきたいと考えている。読者の方々の忌憚のないご意見を期待したい。また、こういった地域の色をあらためて世に出すことで、地域おこし、活性化に寄与する方策なども色々考えることができると思われるが、この点については別稿に譲りたい。

[付記] 筆者が、立命館大学文学部地理学科に入学し、地理学研究会に入部したのは1977年であり、その時の地理研村落班の班長が3回生の河島先輩であった。以後、村落班員として、阪神ファンとして、また、僭越ではあるが地理学を究めることを目指す同志として、公私に渡って40余年大変お世話になってきた。地理学の中で何を専門とするか、道に迷う私を谷岡武雄先生流歴史地理学や千葉徳爾先生・大島襄二先生流の文化・民俗地理学へ導いていただいたのは河島先輩であった。記して感謝し、小稿を謹呈させていただきます。

注

*キーワード：景観要素、象徴、色、文化地理学、都道府県

Key words : Landscape elements, Symbol, Colors, Cultural Geography, Prefectures

- 1) 宮崎県(2020)「宮崎県の紹介」、<https://www.pref.miyazaki.lg.jp/kohosenryaku/kense/koho/symbol.html>。
- 2) 鹿児島県(2020)「鹿児島のシンボル」、<https://www.pref.kagoshima.jp/pr/gaiyou/symbol/index.html>。
- 3) 熊本県(2020)「熊本のシンボル」、https://www.pref.kumamoto.jp/kiji_3207.html。
- 4) 音景観に関する研究事例として、坂本優紀(2018)「住民による地域のサウンドスケープの発見と活用 - 長野県松川村におけるスズムシを活用した地域づくりを事例に -」、地理評91(3)。同(2018)「石川県金沢市における用水路が作り出すサウンドスケープ」、地理科学73(4)、197-211。
- 5) さいたま市(2020)「区の色・区の花」、<https://www.city.saitama.jp/006/007/016/002/index.html>。
- 6) Paul Fickelerは、文化としての宗教景観の色について言及しているし、下津や戸所は、奈良や京都における色文化の伝統性とその変化について明らかにしている。Paul Fickeler(1962)Fundamental Questions

- in the Geography of Religions. ed. Philip L. Wagner and Marvin W. Mikesell, *Readings in Cultural Geography*, 94-117。下津光保子 (1978) 「都市における色彩の文化 - 旧奈良市の場合 -」、日本都市学会『都市と文化』、地人書房、85-92。戸所泰子 (2004) 「京都市における町屋と町屋風建築物からみた「地域の色」の継承と創造」、立命館地理学 16、115-131。同 (2006) 「京都市都心部の空間利用と色彩からみた都市景観」、地理学評論 79 (9)、481-494。
- 7) 本稿では、農畜水産物等で特に生産の多いものを取り上げた。統計は 2018 年度農林水産省統計他による。
- 8) 中村周作 (2018) 「地域の色 (エリアカラー) を使った地域振興」、同『佐賀・酒と魚の文化地理 - 文化を核とする地域おこしへの提言 -』、海青社、180-184。
- 9) 福島県印刷工業組合 (2018) 「ふくしまの伝統色事業 ~ふくしまの伝統色彩調査と色彩文化の保存・発信~ ふくしまのいろ」、<http://www.f-pia.com/pdf/pamphlet.pdf#search>。
- 10) 那須塩原市 (2020) 「那須塩原市屋外広告物条例について」、<http://www.city.nasushiobara.lg.jp/23/008228.html>。
- 11) 新潟県酒造組合 (2020) 「新潟淡麗 新潟県酒造組合公式サイト」、<http://niigata-sake.or.jp/index.html>。
- 12) 国税庁課税部酒税課 (2017) 「国内製造ワインの概況 (平成 28 年度調査分)」、<https://www.nta.go.jp/taxes/sake/shiori-gaikyo/seizogaikyo/kajitsu/pdf/28wine.pdf#search>。
- 13) 京都市都市計画局都市景観部景観政策課 (2015) 「建築物等のデザイン基準 (美観地区・美観形成地区・建築物修景地区)」の「都市計画に定める建築物の形態意匠の制限」に定める色彩による。https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/cmsfiles/contents/0000056/56458/design_kijun_2704.pdf#search。
- 14) 香川県 (2020) 「香川県の風土から生まれた讃岐三白」、https://www.pref.kagawa.lg.jp/kenkyoui/gimu/hometown/kagawa/n_pdf/44_53.pdf。
- 15) 佐賀段階とは、1937・38年に、それまで踏み車で揚水していたところに電動ポンプが導入されて生産効率が上がり、米の単位面積当たり収量日本一を記録した時期。新佐賀段階は、1965・66年に乾田化などの土地改良や機械などの導入、集団統一栽培の実施などにより、再び単位面積当たり収量日本一を記録した時期。日本の米作は佐賀段階、新佐賀段階に至ると称された。青野壽郎・尾留川正平編 (1976) 『日本地誌 20 佐賀県・長崎県・熊本県』、二宮書店、21-23。

(宮崎大学教育学部教授)

Cultural-Geographical Considerations of Symbolic Colors for the Region as One of the Components of Landscape

by
Shusaku Nakamura

This study clarified the features of regions through their symbolic colors as one of the components of landscape. It particularly examined the colors of things locally featured (TLFs) in the 47 prefectures nationwide such as landscapes, buildings, agriculture, livestock and marine products.

We found that 1) white was used for 35 TLFs (26.3%) out of 131 TLFs in total, representing snow in northern regions, white vegetables nationwide, white sugar and white volcanic ash in Kyushu regions; 2) red was used for 33 TLFs (24.8%), representing sacred buildings such as shrines and the slogan of passion and strength. The colors white and red also symbolize Hinomaru, the national flag of Japan. We also found that 3) brown was used for 24 TLFs (18.1%) in total, symbolizing old wooden buildings, delicious local cuisine; 4) green was used for 10 TLFs (7.5%) in total, symbolizing Japanese nature such as mountains, green vegetables in suburban agriculture; 5) yellow was used for 9 TLFs (6.8%) in total, representing the color of products in each of the regions; 6) black was used for 8 TLFs (6.0%) in total, symbolizing characteristic black soil, black products and local residents' personal character, that is, simplicity and fortitude, mainly in the Kyushu region.

This is my hope that utilizing proactively and intentionally those symbolic colors specific to the regions will help contribute to local innovation and revitalization.